

小中学校社会科におけるグローバリズム・ナショナリズムとアイデンティティの教材化

—「外国人労働者問題」を事例として—

橋本祥夫

1 問題の所在

現代社会をとらえるよく知られたキーワードに「グローバル化」がある。教育政策でも、グローバル化への対応が求められている。その例の一つとして、小学校英語の教科化がある。グローバル化の進展によってそれに対応せざるを得ないのか、グローバル化の流れを積極的に取り込もうとしているのか、いずれにせよ、グローバル社会は必然のものとして認知されている。社会事象を学習対象とする社会科でも、グローバル化による社会の変化を取り上げる必要がある。また、外国籍の児童生徒が在籍していることが、最近では珍しくなくなってきた。しかし、社会は必ずしも外国人の受け入れに寛容ではないため、外国籍児童生徒のアイデンティティをいかに尊重するかが課題となっている。

本研究では、表面的な現象としてのグローバル化のみを対象とするのではなく、さらにその奥にある「ものの見方・考え方」としての「グローバリズム」を検討していく。その際、「グローバリズム」としばしば対立する「ナショナリズム」と合わせて考えることによって、現代社会のとらえ方についてより深く検討したい。

衆知のように世界は、グローバリズムが強まれば強まるほどに、その反動としてナショナリズムも強まっている。したがって、この両者を合わせ鏡にすることで、現代社

会の姿はよりわかりやすくなるのではないか。またその際、社会のあり方としてのグローバリズムやナショナリズムと、個人の生き方としてのアイデンティティの関わりを検討することで、よりリアルに具体的に、現代社会の姿が描き出せるのではないかと考えている。

グローバリズムの現状を理解するためには、ナショナリズムの台頭についても理解しなければならない。グローバルとナショナルはローカルにおいて身近な事例として起こっている。グローバル、ナショナル、ローカルは、空間的にも重なり合い混在している。さらにそれは空間認識に留まらず、心理的な認識が強く表れる。つまり、自分の立ち位置としてのアイデンティティにかかわってくる。現在グローバル化が進み、人・モノ・サービスの移動が顕著になっている中で、特に人の部分で移民問題を取り扱う事象としては、移民労働者の流入であり、それは日本では外国人労働者問題として表れている。したがって、外国人労働者問題を取り上げることにより、グローバリズム、ナショナリズムとアイデンティティについて理解できるのではないかと考えた。

2 先行研究

先行研究として、二井と三浦の2つの先行研究を取り上げる¹⁾。

二井(2013)は、グローバルヒストリー教育でどのようにナショナルアイデンティ

ティが扱われ、どのようなアイデンティティの形成が意図されるのかを、アメリカのグローバル歴史教育プロジェクトが開発した教材（World History for Us All; 以下 WHFUA）のカリキュラムをもとに検証した²⁾。二井は、WHFUA は重層的なアイデンティティの形成を明確に意図していると指摘している。その理由として、生徒は、グローバル社会の一員としての自分、特定の民族、国家、社会の一員としての自分、身近な人間同士の連帯の中にある自分などといった多様な立場で、柔軟に歴史を捉えているからである。世界史をアイデンティティの変化として捉えている。

小中学校における歴史学習は日本を中心に学習するため、グローバリズムとアイデンティティの変化を扱う場合、グローバルな視点からの変容を日本の立場から捉え直すことが必要となる。

三浦（2009）は、「外国人医療保障問題」を事例に、社会の動態的認識モデルに基づいて、現状と未来を見据えた新たな社会システムの形成に有効となる中学校社会科公民的分野の単元開発を行った³⁾。三浦は外国人を定住外国人、一般外国人、非正規滞在者に分類し、それぞれの立場から社会システムにどのような違いがあるのか、またその問題点は何かを考える授業を構想した。三浦は社会システムを次々に起こる状況の変化において常に変化する動態的なものとして捉え、必ずしも早急の解決策を導くことにこだわらず、今後の社会の展望を自ら描けることをねらいとしている。

三浦の研究は、グローバルな視点からの変容を日本の立場から捉え直しており、小中学校の社会科学習に援用することは可能である。しかし、アイデンティティに踏み込んでいないため、制度論、システム論の考察に留まっている。

本研究では、先行研究を踏まえ、グローバル社会による流動と変容をアイデンティティの変化と結びつけて考えたい。その際、

グローバリズムだけでなく、その反動としてのナショナリズムを合わせて考えることにより、グローバル化の問題についても考えられるような単元開発を行っていく。

3 概念フレームワークの検討

(1) グローバル化のとらえ

グローバル化とは、一般的に「国境線が低くなり、ヒト、モノ、カネ（資本）、サービスの国境を越える活動が活発化する現象」といわれている。グローバル化が進行すると、画一化・統一化と混在化・多様化の相反する現象が同時進行に起こる。

画一化・統一化は、共通基準となるグローバルスタンダードの設定である。それは、法や共通のルール、制度、貨幣などに表れる。背景となる普遍的価値は、自由、効率、公平、共通の正義としては、新自由主義がある。一方で、グローバル化が進行すればするほど、混在化・多様化も進行する。多種多様な背景となる人種、宗教、文化（習慣）などに関する価値が混在する社会となるからである。普遍的価値として、自由、平等、多様性がある。共通の正義として、多文化主義がある。

画一化・統一化も混在化・多様化も自由という価値観は共有しているが、効率、公平と平等、多様性は対立することがしばしばある。グローバル化の進展は、経済と結びついて進展することが多い。経済活動で効率や合理性を追究していけば、多文化社会における多様性が障害となることがある。多様性が保障する宗教や文化（習慣）は、合理的ではないところが多々あるからである。

グローバル化の進行により、画一化・統一化を図ろうとすればするほど、混在化・多様化がより明確になってくる。したがって、グローバル化の進行は、ナショナリズムも同時に引き起こし、グローバリズムとナショナリズムはしばしば対立するのである。

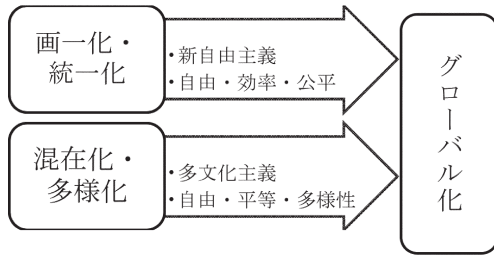


図1 グローバル化の進行のイメージ(筆者作成)

水野は、グローバリゼーションをヒト・モノ・カネの国境を自由に越えるプロセスであると捉えている限り、それはグローバリゼーション推進論者の思うつぼであると、以下のように主張している⁴⁾。

グローバリゼーションとは、「中心」と「周辺」からなる帝国システム（政治的側面）と資本主義システム（経済的側面）にあって、「中心」と「周辺」を結びつけるイデオロギーに他なりません。もっと、直截的に言えば、グローバリゼーションとは、「中心」と「周辺」の組み替え作業です⁵⁾。

グローバル化は、社会や国家を変容させることを余儀なくする。したがって、それに対する反発や反動が必ず起こるのである。

(2) 外国人労働者問題におけるグローバル化をとらえる鍵概念

グローバル化は労働者の「流動」を引き起こす。そのことによって、国家（ナショナル）や地域（ローカル）に様々な「変容」をもたらす。それは、政治、経済、社会、文化など、多岐にわたる。それを国家（ナショナル）や地域（ローカル）に受け入れる「包摂」なのか、外に押し出そうとする「排除」なのかに分かれる。その時、受け入れる側（日本人）と受け入れられる側（外国人労働者）のアイデンティティはどうなのか。

「包摂」はグローバリズムの価値観に立ち、新自由主義・地球全体主義・コスモポリタニズムの立場である。一方、「排除」はナショナリズムの価値観に立ち、国家主義・保守主義・共同体主義の立場である。このように、グローバルとナショナル、グローバルとローカルの関係は「流動と変容」「包摂と排除」を鍵概念として捉えることができる。

一方で、ナショナルとローカルの関係はどうだろうか。外国人労働者を受け入れるかどうかの判断は、法律、制度により規定させる。それを決めるのは政治的、経済的判断であり、政策である。これは国家（ナショナル）としての判断もあれば地方（ローカル）の判断もある。国家の方針に地方が従うのは当然だが、対立することもある。こうした政策判断による外国人労働者受け入れについては「公」の領域である。一方、国民感情、市民感情として、受け入れ条件が変わってくることもある⁶⁾。こうした国民感情、市民感情による受け入れの判断は、「私」の領域である。近年ではヘイトスピーチも社会問題化し「私」の領域が大きな影響を及ぼすこともある⁷⁾。このように、外国人労働者受け入れに関して、ナショナルとローカルの間で「公と私」も鍵概念として考えることができる。

本研究では、外国人労働者問題の教材開発を進めるに当たって、ローカル、ナショナル、グローバルといった空間的・心理的な広がりとして、「包摂と排除」「流動と変容」「公と私」の鍵概念を掛け合わせたマトリクスにしたがって、教材開発を行った⁸⁾（表1）。

表1 「外国人労働者問題」の教材化のマトリクス（水山光春氏が作成したものに筆者が加筆）

	排除と包摂	流動と変容	公と私
グローバル	<ul style="list-style-type: none"> ・欧州市民権（マーストリヒト条約） ・南北問題や難民問題などの国際的な課題を背景とした外国人労働者問題 		個人の思想・信条の自由と、公的な空間での行為（学校の制服など）の対立
ナショナル	<ul style="list-style-type: none"> ・外国人労働者の受け入れ方法、在留資格の問題（社会的権利） ・外国人労働者受け入れの目的と条件 	<ul style="list-style-type: none"> ・外国人労働者のアイデンティティの変化 ・歴史的にみる日系移民のアイデンティティの変化 ・現代の海外で生きる日本人のアイデンティティ ・諸外国に見られる外国人労働者増加の傾向 ・日本における外国人労働者のアイデンティティ（日本人の拒否、同化政策） 	ネット上での私的な書き込み、ヘイトスピーチの問題と、表現の自由
ローカル	<ul style="list-style-type: none"> ・外国人参政権・外国人代表者会議 ・18歳選挙権 ・22歳での国籍の選択（政治的権利） ・子どもの学校での母語習得の機会の確保（社会的権利） ・人手不足を補うための外国人技能実習制度 		

4 小中学校の社会科学教育における外国人労働者問題

小学校社会科学習指導要領では、外国人労働者について学ぶ学習は設定されていない。ただし、国際理解教育の観点から、外国について学ぶ学習はある。従来、小学校社会科における外国人労働者の問題は、5年生の産業学習で、ローカルで「排除と包摂」の問題として取り上げていた。ここでは、人権問題として、「外国人労働者をどのように受ける入れるべきか」が主要な問題となる。

中学校社会科学習指導要領では、地理的分野、公民的分野において、外国人労働者を取り上げている。

地理的分野においては、「移動」という地理的概念に着目し、国際化する社会の中

での我が国、世界における外国人労働者の増加の実態について学ぶことになる⁹⁾。取り上げる指導内容は人々の生活が中心となっており、「同じ地域の過去と現在の生活を比較してその変化に着目し、人々の生活が可変的なものであることに気付かせる」学習となっていることから、ローカルの「流動と変容」の学習になりうる。公民的分野においては、我が国で増加する外国人労働者と我々日本人が互いに理解し、共生する社会をつくりあげる必要性を学ぶことになる¹⁰⁾。

地理的分野ではグローバル化に伴い、ローカルレベルでの「流動と変容」の学習が想定されるが、公民的分野では、最終的には制度的な問題に結びつくため、ナショナルレベルでの「排除と包摂」となる。しかし、小学校では、産業構造の問題や人権問題との関連から外国人労働者を限定的に扱

うのに対して、中学校では、現代社会の問題として外国人労働者を様々な視点から捉えることができる。

5 研究目的と方法

本研究では、現代社会の課題としての「グローバリズム、ナショナリズムとアイデンティティ」について、小学校、中学校ではどのような授業実践ができるのかを検証するために、それぞれで、外国人労働者をテーマにした学習を行った。同じテーマによる校種の違い、発達段階の違いを考察するためである。鍵概念として、外国人労働者の発生、問題の背景を「流動と変容」、外国人労働者の受け入れの問題を「排除と包摂」と捉え、授業実践を行った。鍵概念を発達段階に応じて、どのように捉え、どこまでを指導するのか、その違いを考察した。

授業実践は、小学6年生、中学3年生で行った。外国人労働者に関連しては、小学校では、5年生で学習する農業や工業の学習で取り扱うことができる。中学校でも、地理的分野で取り扱うことができる。各校種の最終学年であるため、各校種における既習事項やこれまでの学習経験を踏まえた学習が可能となり、各校種の実践の特徴が一層よく出ることが期待できる。

本研究では、あらかじめに設定した授業プランを実践してもらった検証授業ではなく、授業実践者（以下、授業者）がどのように授業を構想し、改善を試みるのかアクションリサーチを行った¹¹⁾。研究の趣旨や実践内容について同じ説明をし、同じ新聞記事資料を提示して、授業実践を依頼した。モデルの展開例は示したが、学級の実態や学習内容に応じて、自由に実践をしてもらうように依頼した。授業者は、研究内容を理解したうえで、小学校、中学校それぞれの学校段階や発達段階に応じて授業を構想し、実践した。そして、授業実践を観察、記録

し、授業記録や映像記録をもとに授業者の振り返りを促した。授業での生徒の発言やワークシートの記録などから授業実践を分析し、検証した。

6 実践の概要

(1) 小学校の実践

- ① 実践日 2016年2月21日 4限
- ② 実践者・実践場所 宮代大輔（京都教育大学附属京都小中学校6年）
- ③ 単元名「外国人労働者を考えよう」
- ④ 単元目標

外国人労働者は日本の生産労働者として欠かせない存在になってきていること、それにもかかわらず、都合よく使い、差別的待遇をすることによって、外国人労働者の独自性を認めていない実態があることを理解する。

⑤ 本単元で取り上げる見方・考え方

ローカルで「排除と包摂」の視点で、外国人労働者の問題を考える。「排除」の視点から、「なぜ外国人労働者を受け入れないのか」、「包摂」の視点から、「なぜ外国人労働者を受け入れる必要があるのか」を多面的、総合的に考えることができる。

⑥ 単元について

本時は、食糧生産と工業生産の学習を踏まえて、働く人の問題として、社会的弱者の労働環境の問題を取り上げ、我が国の農業生産や工業生産の課題を明らかにすることを目的にしている。取り上げる社会的弱者の事例の一つとして、外国人労働者を取り上げる。

本時は、日本のさまざまな産業には外国人労働者が従事していること、そしてその外国人労働者をめぐってさまざまな問題があることを新聞記事から読み取り、どのようにしていくべきかを考える内容となっている。生徒たちは普段あまり気にかけていない外国人労働者について学ぶため、興味を喚起する手立てが必要になる。そこで、

なるべく興味を持てるよう学習旅行先の長野県にある川上村を取り上げ、小学校5年生で学んだことのある農業を取り上げることにした。前年度に農業を取り上げ、授業を行った際に後継者不足で低賃金・重労働であることを学んでいるので、川上村を取り上げ、村全体の平均年収が2500万円以上にもなる¹²⁾ことにギャップを感じ興味を持って取り組むことができた。

⑦ 児童の分析と指導意図

本時は、日本のさまざまな産業には外国人労働者が従事していること、そしてその外国人労働者をめぐってさまざまな問題があることを新聞記事から読み取り、どのようにしていくべきかを考える内容となっている¹³⁾。

本時は論理的思考の形式として「比較する」ことを想定している。この「比較する」は、たとえば、日本人労働者と外国人労働者（時間が許せば、日本での外国人労働者の扱いと海外での外国人労働者に対する扱い）を比較し、「外国人」ということだけでどこまで日本人との差が許されるのか（許されないのか）を考えるために用いる。

分析としては、授業後のワークシートを次の3つのタイプに分類して検討した。

[Aタイプ] 外国人労働者問題の現状や外国人労働者を取り入れた背景を理解し、外国人労働者問題をどのように解決していけばよいかを考える。

[Bタイプ] 外国人労働者に対する差別や偏見、不当な扱いといった外国人労働者問題の現状を把握し、その背景にはどのようなものがあるかを理解している。

[Cタイプ] 外国人労働者に対する差別や偏見、不当な扱いといった外国人労働者問題があることを知る。

⑧ 本時の展開

分節	児童の学習活動と主な反応	○指導者の支援及び留意点
着眼	1. 長野県川上村の外国人技能実習制度を利用した「成果」を知る。 <ul style="list-style-type: none"> ・500万円 ・1000万円 <ul style="list-style-type: none"> ・とても高い野菜を育てている。 ・すごく大規模に野菜を育てている。 ・なぜ、外国人がいるのだろうか。 	○「(資料1を提示し) 平均年収が何万円か考えてみよう。(村全体)」 ○「実は一戸2000万円。専業農家の平均の10倍以上もある。」 ○普通の農業を行っている人の年収はいくらだろう。 <ul style="list-style-type: none"> ・日本全体の専業農家の平均年収は200万円、日本全体の平均年収は500万円であることを提示する。 ○「なぜ、このように高い年収なのか。」 <ul style="list-style-type: none"> ・有名なものがレタスだと伝える。 ○「実は外国人の方が安い賃金で働いている。」
分析	2. 外国人技能実習制度とその実態を知る。 <ul style="list-style-type: none"> ・外国人だったら最低賃金を下回ってもいいのか。 ・このお金で生活できるのだろうか。 ・日本も技術を与えているのだから安くても仕方ない。Win-Winの関係だ。 ・なぜ、停止されたのか。 <ul style="list-style-type: none"> ・低賃金で雇っている。 ・朝の2時から夕方18時まで働かせるなんて信じられない。 	○「外国人技能実習という制度があり、日本の技術を学ぶ代わりに、安い賃金で働いている。月額8万5千円。時給換算すると530円ほどで、最低賃金の全国平均の703円(当時)よりも安い。」 ○「実はそんな良いこと尽くしの外国人実習生の受け入れが停止されました。」 ○「(資料2を提示し) なぜ、停止されたのでしょうか。問題点・おかしな所を新聞から考えてみましょう。」

分析	<ul style="list-style-type: none"> ・悪いことをしていないのに罰金を取るのはおかしい。 ・事業協同組合が黙っていたのがおかしい。 ・技術を全然教えていない。 ・死亡する事例というのはひどすぎる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・最初に5分ほど時間を取り、新聞を読ませる。
	なぜ外国人技能実習制度が取り入れられたのだろう	
	<p>3. 取り入れられていた背景を考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・少子高齢化などで農業をする若い人が少なくなっている。 ・大変な仕事なので農業をする人が少なくなっている。 ・野菜に対する需要が高くなってきていてそもそも人手が足りない。 ・海外の安い野菜に対抗しなければならないので、そのために安い労働力を必要とした。 	<ul style="list-style-type: none"> ○「このように多くの問題が出てきている制度だが、なぜ外国人技能実習制度が取り入れられたのだろう」 ・新聞の最後にヒントがあることを伝える。
一般化	<p>4. 外国人の労働者問題に対してどのように感じたのかをワークシートに書く。</p> <p>5. プリントに書いた意見を発表する</p> <ul style="list-style-type: none"> ・外国人労働者問題の現状、外国人労働者を取り入れた背景、これからどうすべきかを含む意見を発表する 	<ul style="list-style-type: none"> ○「農業をする人が少ないために、外国人実習生を受け入れてきたが、このようにさまざまな問題がある。今日の授業で感じたことやこうしたら良いのと思ったことを書きなさい。」 ○「それでは、代表の人に発表してもらいましょう」 ・事前に机間指導で当てる生徒を決めておく。その際の基準として、生徒分析のAタイプを当てるようにする。

資料1 長野県川上村の農家の平均年収

資料2 「来日実習生『時給25円』人手不足 制度拡充の方針」2014.12.25朝日新聞1面、「きつい仕事外国人頼み」同日、同紙3面

⑨ 児童の反応（ワークシートより一部抽出）

タイプ	ワークシートの記述内容
A 11人	<ul style="list-style-type: none"> ・正しく技能を教えて、時給も働く時間もちゃんとするなら外国人を受け入れてもいいと思いました。 ・外国人実習生が外国に帰国した時、生かせるようなことを教えて、無理をさせないような制度を作るとよいと思います。 ・問題点がたくさんあって、大きいのはお金の問題なので、時給をもう少し上げて、外国人がもっと働きたくるようにすれば、どちらも得するし、死んでしまう人も出ないと思った。 ・日本人は外国人に技術を教え、農業の楽しさなどを知って働く。もちろん時給もそれだけ（日本人と同じ）値段にし、働く時間も8時間以下にすればいいと思う。 ・農業は少子高齢化が進んでおり、外国人を雇うのは農業の人にとってはいいかもしれないけれど、低賃金で技能を教えず、16時間ほど働かせて死亡させてしまうなら、高齢化のままの方がよいと思いました。 ・外国の人でも日本人と同じ時給にして、誰とでも同じように接してほしいと思った。 ・外国の人ばかりに頼ってはいけない。 ・外国人はすべて悪い人ではない。
B 16人	<ul style="list-style-type: none"> ・外国人を受け入れることは大切だが、きちんと法律を守ったうえでしないと実習生の不足、労働者の減少などが起こるので、法律を守らなければいけない。 ・日本人が助けてもらっているのに、外国人をひどく扱うのは外国人が損をしてばかりいるのでめだと思った。 ・外国人技能実習に頼るのではなく、若い人に呼びかけていかなければならないと思った。

	<ul style="list-style-type: none"> ・外国人がいないと自分たちが困るので、外国人がどんな人であってもちゃんとした対応をしたほうが良い。 ・実習生の中には、日本で学んだことを母国でもと思っていた人がいたかもしれないのに悲しい。 ・技術を教えなかったり、たくさん働かせているのに時給が低かったり、ついには外国人実習生がなくなったりということが起こって、外国人技能実習制度をやめてよかったと思った。 ・これからは、外国からわざわざ日本に来てもらうということと教えることにより、世界にたくさんの方を発信できるということを思って、優しく接してほしいです。 ・少子高齢化で労働力が不足しているという、外国人の若者に技術を教えずに押し付けるのはよくないと思った。 ・最初はいいことだと思っていたけど、本当は最低なことをしていたんだなあと思いました。 ・外国人は日本人より悪いイメージがあったけれど、日本人も外国人を利用している（悪く言えば）んだなと分かった。
C 2人	<ul style="list-style-type: none"> ・制度をやめてしまうと日本人にとっては安い賃金だが、外国人によっては高いこともある。だからどちらにとってもそれは避けたい。外国人のために良い環境づくりをすることが、外国人と近づく第一歩だと思った。 ・外国人技能実習制度を取り入れなければならなかったとなっているが、その制度を何度も検討し、違う改善策を出すべきだったと思う。

⑩ 児童の反応の分析

Aタイプの児童は、解決策を具体的に考えられている児童である。解決策として日本人と同等の労働待遇にするべきだと主張している。これはほぼすべての児童に当てはまる。児童は、外国人技能実習制度を人権問題と考えている。技術や農業の楽しさなど、外国人労働者の立場に寄り添った意見が多く見られた。

Bタイプの児童は、現状とその背景が理解できている児童である。日本人と違う劣悪な労働環境で働かせている問題点を指摘している。特に道徳的な反応を示した児童は、公正・公平という価値観で問題点を指摘し、そのような事業所を取り締まる必要があると主張する。

Cタイプの児童は、外国人労働者問題があることを認識するにとどまっている児童である。現状ではだめで何らかの改善が必要だということでは理解している。外国人にとっても必要だという認識に立っている児童もいた。

鍵概念である「流動と変容」については、少子高齢化という国内事情によるものにとどまっている。ローカルな問題ではなく、ナショナルの問題として捉えている。「排除と包摂」では、基本的に「包摂」の立場

であり、「包摂」のためにどうするべきかを考えている。労働市場の変化など外国人労働者による弊害には気がつかないので、「排除」の発想には至らない。

⑪ 授業者の振り返り

授業者が授業を行わず感じたことは、道徳とどう違うかをはっきりとさせておくべきだということだった。最後の発問が少し悪かった面も多々あるが、外国人労働者に対しての「差別や偏見」に対して、「よくない」「日本人と同じ対応にすべき」と自身の心情に基づいて記述している生徒も多く、社会的事象を根拠におくよう発問すべきだった。児童が提出したプリントを見ると、外国人労働者問題の現状や背景はきちんとかけているが、その後の意見（どうすべきか）においては7名が道徳的な意見となっている。本時の目標（外国人労働者問題の現状・背景の把握）は達成しているものの、道徳の授業との違いが明確でなかったため発問を改めるべきであると授業者は感じた。

児童が提出したプリントを見ると、多くは本時の目標を達成（28名）してはいるものの、Aタイプ・Bタイプの生徒をもう少し細かく設定していく必要がある。同じBタイプであっても、「法律を守っていく

べきだ」「現在の制度を見直していくべきだ」という意見を書いている生徒もあり、Aタイプとの区別をしづらかったり、Aタイプの生徒においても「日本人と同等に扱うべき」という意見や「労働時間を8時間以下にして、賃金もあげるべき」といった具体的な意見まであり、これを同じグループでくくってもよいのかという争点もでてきた。もう少し、生徒の分析を細かく、分かりやすく変えていくべきである。

小学校段階では、やはり外国人労働者問題を知り、その現状や背景を把握するまでに留めることがよい。小学生は外国人労働者がいるということも知らない状態であり、本時では「どのようにしていくべきか」という発問を加えたが、これを目標としてしまうにはレベルが高いように授業者は感じている。

(2) 中学校の実践

① 実践日 2016年2月21日 5限

② 実践者・実践場所 西田直記（京都教育大学附属京都小中学校9年）

③ 単元名「外国人労働者問題を考えよう」

④ 単元目標

外国人労働者を受け入れることについて、様々な観点を考慮して、受け入れの条件をその目的を明確にして考えることができる。

⑤ 本単元で取り上げる見方・考え方

ナショナルレベルでの「排除と包摂」の視点で、外国人労働者の問題を考える。これからの日本の外国人労働者の制度を考えていく上で、「どのような制度が望ましいのか」という、受け入れのための「目的」と「条件」を考えることで、多面的・多角的に外国人労働者の問題をとらえることができる。

⑥ 単元について

本単元は、中学校学習指導要領の公民的分野(4)イ「私たちと国際社会の諸課題」の「よりよい社会を目指して」に当たる単元である。

外国人労働者については、その待遇や人権の保障自体が問題にされることはあっても、受け入れの是非については「国内問題」としてだけ捉えられ、デメリットとメリットを比較して論じられることが多い。しかし、先述したように日本には多くの外国人労働者が働いているので、外国人労働者という視点からも問題を考える必要がある。また国際社会の一員である日本にとって、この問題は単なる国内問題ではない。これからの日本の外国人労働者の制度を考えていく上で、「どのような制度が望ましいのか」について多面的・多角的にとらえることが必要である。そのため本単元では、日本国内の問題・外国人労働者の問題・国際社会の中での問題という3つの観点から外国人労働者受け入れについて考える。

本単元では、地理的分野で学習した地域の産業や日本の産業、国際社会との関わりや公民的分野で学習した人権・労働条件に関わる憲法や法律・少子高齢化や日本の財政問題などが議論のベースになっている。

⑦ 生徒の分析と指導意図

本時は論理的思考の形式として「分類する」ことを想定している。本時は、外国人労働者問題を「国内問題」「外国人労働者」「国際社会」の3つの観点に分け、それぞれの目的と条件について検討させ、外国人労働者問題を多面的・多角的に検討、吟味する内容となっている。生徒たちは一つのテーマについて、様々な観点から考えることが求められるため、グループ活動を通して、様々な意見を聞く場を設けることが必要である。また、価値判断・意思決定をするために必要な情報を知っておくことが必要であり、前時で外国人労働者問題についての課題を理解したうえで本時の学習に臨んでいる。

分析としては、授業後のワークシートを次の3つのタイプに分類して検討した。

[Aタイプ] 3つの観点から、外国人労働者問題の目的や条件を考えている。

[Bタイプ] 2つの観点から、外国人労働者問題の目的や条件を考えている。

[Cタイプ] 1つの観点から、外国人労働

者問題の目的や条件を考えている。
あるいは考えることができなかった。

⑧ 本時の展開

分節	生徒の学習活動と主な反応	○指導者の支援及び留意点
着眼	1. 前時で考えていた外国人労働者受け入れのメリット・デメリットが、どのような観点からだったかを考える。 ・日本の経済状況をよくするため メリット→労働力の不足、人気のない仕事を埋める デメリット→雇用が減少する・治安の不安 2. 資料1を読んで、外国人労働者のおかれている厳しい労働環境や環境の整備が十分に進んでいない側面があることを理解する。	○外国人労働者を受け入れるメリットとデメリットは何だろう。」 ・既に現行の制度によって様々な外国人労働者が働いていることを確認する。 ・一概に外国人労働者を受け入れることの是非を論じることは難しく、どのような条件を設定するかが課題であることを理解させる。
分析	外国人労働者の受け入れにあたって大切なことは何だろう 3. 外国人労働者を受け入れるにあたってどのようなことが大切かを次の3つの観点から考える。 ・日本の状況をよくするために ・外国人労働者のために（人権・生活の保障など） ・グローバルな視点から（南北問題や難民問題など）	○「外国人労働者を受け入れるにあたってどのようなことが大切なのかを考えよう。」 ・外国人労働者の問題を考えることは日本のためという観点ではないことに気付かせる。
一般化	外国人労働者受け入れのための目的と条件を考えよう 4. 外国人労働者を受け入れることについての「目的」とそのための「条件」を考える。 5. グループで話し合いを行い、外国人労働者受け入れのための「目的」「条件」をまとめ発表する。	○「外国人労働者を受け入れるための目的と条件を考えよう」 ・3つの観点を意識して考えさせ、内容を表にまとめる。 ・すべての観点を満たしてもよいし、満たさなくてもよいということを伝える。 ・どのグループの意見がよかったのかについて集計し、その理由を発表させる。

資料1 「来日実習生『時給25円』人手不足 制度拡充の方針」2014.12.25朝日新聞1面、「きつい仕事外国人頼み」同日、同紙3面

⑨ 生徒の反応（ワークシートより一部抽出）

タイプ	ワークシートの記述内容
A 17人	<ul style="list-style-type: none"> ・日本は多くの外国人観光客が来る国であり、さらに企業のグローバル化も進む国だから、外国人労働者は必然的に必要となる。一方で、労働条件や差別問題や日本人でも就職難民がいるという問題もある。外国人には外国人にしかできないこと（例えば、現地との連絡や他国ならではの考えなど）があるのではないか。 ・日本は若者の割合が減少傾向にあり、介護職につく人が減っている。また労働者不足に悩む地域もあり、少子化もどんどん進んでいるので、日本は将来的に受け入れていくべきだと思う。 ・ニュースなどで、よく外国人労働者が一生懸命働いている割に賃金が低いと聞くので、日本人労働者と対等に扱われていないことが問題だと思う。外国人労働者をもっと増やすべきだと思う。このままでは、高齢化が進んで、日本の働き手にとって、税金などの負担が重くなると思う。

<p>B 6人</p>	<ul style="list-style-type: none"> 外国人だからといって仕事の受け入れをやめたりせずに、基準をクリアしていたら受け入れなどを積極的にしていくべきだと思う。受け入れなかったら、少子高齢化で人が少なくなって、社会が回らなくなる。 受け入れるべきではないと思う。非正規雇用がまだまだ多い日本で、外国人労働者を増やせば、さらに日本人雇用が減ってしまい、外国人を雇えばコストが安くて済むが、労働時間などの日本人との違いによって、問題が起きてしまう。 受け入れた方がよいと思う。日本は少子高齢化で、これから働き手も減っていくだろうし、外国人労働者を受け入れたほうが、経済が回りやすくなるかもしれないから。けれど、日本の外国人労働者を受け入れる準備ができていないままどんどん受け入れてしまうと、職に付けず、周りの環境が良くないところで働くしかなくなるのではないか。
<p>C 5人</p>	<ul style="list-style-type: none"> 日本人労働者が減るけど、企業にとって、日本人より良い仕事をするならいいと思う。業績が上がって、雇用人数が増えれば、日本人も入れる。

授業で行った分類

	目 的	条 件
国内問題	<ul style="list-style-type: none"> 労働力不足を防ぐ。 経済発展 地方と都市の差を埋める。 	<ul style="list-style-type: none"> 不足している分だけ受け入れる。 外国人労働者が増えすぎるのを防ぐために、日本で働く期間などを決めておく。 技術者、専門職を優先する。 外国人労働者同士で交流できる環境（安心感） 法整備（給与、労働時間などの待遇） 受け入れ事業所の監視、監督、指導 労働組合を作る。 サポート体制を作る。
外国人労働者	<ul style="list-style-type: none"> 職を得る。 お金を稼ぐ。 よりよい暮らしを求める。 	<ul style="list-style-type: none"> 日本のマナー、ルールを学んでから来てもらう。 犯罪歴のない人。 日本語が話せる。 宗教に厳しくない人。 自国で承認を得る。
国際社会	<ul style="list-style-type: none"> 難民を減らす。 南北問題を解決する。 	<ul style="list-style-type: none"> 技術協力 国同士の交流

⑩ 生徒の反応の分析

Aタイプの生徒は、3つの観点から、外国人労働者問題の目的や条件を考えることができた生徒である。外国人労働者問題を多面的・多角的に考えられている。Aの生徒は、全体の60%を占め、学習のねらいはおおむね達成できていると考えられる¹⁴⁾。しかし、意見として見られるのは、少子高齢化や企業のグローバル化など、国内問題に関することが多く、外国人労働者や国際社会の視点からの意見は少なかった。

Bタイプの生徒は、2つの観点から、外国人労働者問題の目的や条件を考えることができた生徒である。2つの観点と

も、全員が国内問題と外国人労働者の視点で書いており、国際社会の視点で書けていない生徒である。意見としては、Aタイプの生徒同様、国内問題の視点での意見が多く、経済的な理由を挙げている。

Cタイプの生徒は、1つの観点から、外国人労働者問題の目的や条件を考えた生徒及び考えられなかった生徒である。1つの観点で考えた生徒は1人だけで、国内問題として考えている。この生徒の意見は、「日本人労働者が減るけど、企業にとって、日本人より良い仕事をするならいいと思う」という意見である。日本人を優先して、外国人労働者は日本人労働者の足りない部

分を補うにとどめるべきだという意見が多数を占める中、日本人労働者と外国人労働者を分けて考えることがおかしいという捉えである。したがって、外国人労働者を特別視して、他の視点で考える必要もないという立場であったと考えられる。

3つの視点とそれぞれの目的と条件のマトリクスでは、国内問題について多くの意見が見られた。目的としては、少子高齢化による労働者不足を補うためや企業のグローバル化など、経済性によるものが多かった。条件としては、受け入れ態勢（受け入れる側の姿勢、法整備やサポート体制など）が不十分であり、そうした体制を整えることが必要だという意見が多く見られた。

外国人労働者の目的としては、職やお金を得る、よりよい暮らしを求めるというもので、出稼ぎ労働者というイメージである。条件は、「日本のマナー、ルールを学んでから来てもらう」「犯罪歴のない人」「日本語が話せる」「宗教に厳しくない人」「自国で承認を得る」など、高いハードルを設定している。原則として、日本になじむことが条件となっている。ここには、異文化理解や多文化共生社会という発想は見られない。

国際社会の目的としては、難民問題や南北問題の解決である。ここでは、地理的分野の学習が生きているが、生徒にとっては日本にはあまり関係のない話だという認識が強い。条件としては、国際協力や国際交流として行うことを挙げている。

⑪ 授業者の振り返り

中学校3年生段階で、「世界」を意識するということはなかなか難しい。それは、問題を深くとらえることが難しいからである。例えば、今回の外国人労働者問題の受け入れについても、様々な論点やケースごとに状況は大きく変わってくる。そのためあまりに1つの事例をもとに学習をすると先入観を持ちやすく、限定的なものの見方をしてしまいがちではないかと思われる。

これは領土問題や他の国際社会での問題でも同様である。しかし、こういった国際社会に関する問題について考えることは、国際社会の中で生きていく人として、重要なことである。授業の中に組み入れるにあたって多くの時間を割くことができれば、多面的・多角的に、生徒自らが調べ追究する教材として扱う価値のある単元であるといえる。しかし、実際のところ授業時間数の関係などから、多くの時数を割いて外国人労働者問題を扱うことは難しい。

そこで本実践では、2時間構成の授業として本単元を設定し取り組んだ。調べ学習としてこの問題を深く追究するのではなく、1時間目で日本の外国人労働者についての現状を把握すること。次に国内でどのようなことが問題になっていると考えられるかということを生徒に予想させた。その上で、外国人労働者を受け入れることでのメリットとデメリットを話しあい、整理させた。そして2時間目で、2つの新聞記事を読ませた¹⁵⁾。資料は外国人労働者の待遇や労働環境が悪いという記事であった。資料を用いた目的は、少子高齢化に伴う労働力不足や雇用が不足していることへの対策であるということと、そのことによって日本人の雇用が失われるというリスクがあるということを理解させるためである。これらは1時間目の話し合いの中で、生徒がEUの問題や少子高齢化の問題、経済の学習をふまえて導き出すことができていたことがらであった。

1時間目では、外国人労働者の受け入れの是非について、どうしても日本にとってプラスかマイナスかでしか問題を考えられなかったのが、この資料を用いることで、外国人労働者の視点でも問題をとらえることができるようになった。つまり、日本人より低い時給であることや生活面でのサポートは必要ではないのかといった話題である。それまでは治安が悪くなるから外国人労働者の受け入れに反対と考えていた生徒

は受け入れに際しての体制の整備の可能性があることへの気づきや、逆に日本の経済がよくなるためなら無条件に（安い賃金で働く）外国人労働者の受け入れは賛成と考えていた生徒が、外国人労働者の人権に目を向けられるようになった。また、整理をする中でグローバルな視点から（つまり南北問題や難民問題への国際貢献）も、視点を設定することで気づきが得られた。

追究活動ではないので、自ら資料を捜し、さまざまなデータを比較してこの問題について考えるには至らないものの、本時の目標である外国人労働者の問題には様々な視点があり、それらのなかでどのように折り合いをつけていくのが難しいのだという気づきは得られ、一定の成果があったと授業者は考えている。そのため生徒の振り返りでも、ただ賛成・反対というのではなく、条件付きで賛成・反対ということが述べられている生徒がいたのが、問題を多面的・多角的にとらえられた証である。

課題としては、最後の「外国人労働者受け入れのための「目的」「条件」をまとめ発表する。」という活動をグループでまとめさせたのだが、議論が拡散してしまい、まとめるのが難しかった。

そのため2時間では時間的にも厳しく、また、議論するためのデータが多くはないため難しい面があった。最後は、様々な視点があることを整理したところで、グループではなく個人でのまとめにすべきであった。

また、国際社会の観点からの意見が出にくかった。生徒にとって一番イメージしにくい視点であるため、この視点に迫れる資料の提示が必要だった。

(3) 外国人労働者問題を扱った授業実践に見られる鍵概念

小学校、中学校共通に見られるのは、外国人労働者の問題の鍵概念としては「排除と包摂」で捉えており、その背景としては、

「流動と変容」である。

外国人労働者が増加する背景を国際的な労働市場の流動化や経済格差、移民・難民問題ととらえ、そうしたグローバル化の流れの中で、外国人労働者の問題が発生してきており、そうした流れにどう対応するかという問題がある。一方で、国内問題としては、少子高齢化の進行による労働者人口の減少、産業構造の変化に伴い、医療、介護、福祉、農業などの一部の産業の深刻な労働者不足のため、外国人労働者に頼らざるを得ない状況が生まれてきたことがある。そうした「流動」の状況において、社会的な組織、法律、制度、人々の意識、外国人労働者のアイデンティティが「変容」する状況が生まれる。

外国人労働者を受け入れる、すなわち「包摂」か、受け入れない、すなわち「排除」かを、「流動と変容」を踏まえて、グローバル、ナショナル、ローカルの3つの範囲で考察した。

どの鍵概念をどの範囲でどこまで考えさせるのか、何を取り上げるのかは、校種によって違いがある。

① 小学校の教材化の視点

宮代実践では、5年生の農業の学習からの発展として外国人労働者問題を取り上げた。長野県川上村を取り上げ、地域的な特色、産業的な特色を「ローカル」な視点で考え、外国人労働者問題を考察した。小学校では、外国人労働者の受け入れを人権問題の側面から考えるのが特徴である。背景として諸外国に見られる外国人労働者の増加を「流動と変容」として捉え、国際的な流れの中で、日本ではどうすべきかを考えた。

しかし、中学校や高等学校のように、対策を考えるとところまでは小学校では難しい。小学校段階では、外国人労働者の問題があるということを認識するというレベルに重点を置いた学習となる。

② 中学校の教材化の視点

表2 授業実践で検証した「外国人労働者問題」の鍵概念（筆者作成）

	排除と包摂	流動と変容
グローバル	・南北問題や難民問題などの国際的な課題を背景とした外国人労働者問題（西田中学校実践）	
ナショナル	・外国人労働者受け入れの目的と条件（西田中学校実践）	・諸外国に見られる外国人労働者増加の傾向（宮代小学校実践） ・日本における外国人労働者のアイデンティティ（日本人の拒否、同化政策）（西田中学校実践）
ローカル	・人手不足を補うための外国人技能実習制度（宮代小学校実践）	

西田実践は、地理的分野で学習した地域の産業や日本の産業、国際社会との関わりや公民的分野で学習した人権・労働条件に関わる憲法や法律・少子高齢化や日本の財政問題などがベースとなっている。本実践では、外国人労働者の問題を「国内問題」「外国人労働者」「国際社会」の3つの視点とそれぞれの目的と条件のマトリクスを作成し、多面的、多角的にこの問題を考察しようと試みた。「国内問題」は「ナショナル」、「国際社会」は「グローバル」の視点である。

「外国人労働者」の視点は、外国人労働者のアイデンティティに関わる問題であり、流動と変容」の状況の中で考えることになる。それぞれの視点で条件と目的を考えることによって、「排除と包摂」を多面的、多角的に考えさせることが重要である。

以上のように、小学校では国際社会が抱える課題などグローバルな視点まで考えることは難しいが、中学校では、ナショナルな視点を考えるにあたり、グローバルな視点を取り入れつつ考えさせることを重視している。

7 本研究の成果と今後の課題

本研究では、現代社会の見方・考え方の一つであるグローバル社会について、グローバリズムと対立する場合のナショナリズム

ムを比較し、世界及び日本で起こっている様々な現象の解説を試みた。空間的、心理的な広がりとして、グローバル、ナショナル、ローカルの視点を設定し、鍵概念として、「包摂と排除」「流動と変容」「公と私」のマトリクスを作り、教材化を図った。

小学校と中学校で、外国人労働者問題をどのように教材化し実践できるかを、アクションリサーチの手法により検証した。グローバル、ナショナル、ローカルのそれぞれの視点と「包摂と排除」「流動と変容」については、発達段階に応じた指導ができることが検証できた。

しかし、「公と私」については扱うことができなかった。社会科では、公共空間として「公」の立場で議論することになる。しかし、アイデンティティに関しては、「私」の立場の影響が大きく、この立場を考慮しなければ、現実社会の現象を理解できたとは言えない。「公と私」をどのように教材化するかが今後の課題である。

注

- 1) 本研究は社会科教育の発展を目指してのものであり、本研究の先行研究は、社会科教育学の主要学会である日本社会科教育学会の学会誌『社会科教育研究』と全国社会科教育学会の学会誌『社会科研究』の過去10年間掲載された論文の中から、本研究に該当するものを取り上げた。
- 2) 二井正浩(2013)「グローバルヒストリー教育におけるナショナルアイデンティティの扱いに

- 関する質的研究』『社会科教育研究』120、pp. 10-21.
- 3) 三浦朋子(2009)「社会的変容過程を動的的に捉える授業―「外国人の医療保障問題」を事例として―」『社会科教育研究』105、pp. 1-15.
 - 4) 水野和夫(2014)『資本主義の終焉と歴史の危機』集英社
 - 5) 同上書、p. 41.
 - 6) 朝日新聞デジタルによるアンケート調査、2016年1月21日実施。「外国人と共に暮らす社会について、どう思いますか」という問いに対して、一番多い答えが「多様な文化や価値観の共生につながる」(19%)であり、次いで「外国の言葉や文化を知る機会が増える」(17%)であった。いずれも外国人の受け入れには寛容である。しかしその次に多い意見は、「生活習慣や言葉の違いで摩擦が起きる」(14%)「外国人の子どもの教育が課題だ」(11%)「治安が悪くなる恐れがある」(10%)と続き、慎重な意見も多くみられる。外国人労働者については「労働者が確保できる」(8%)という意見がある一方、「日本人の仕事がとられてしまう」(3%)もあった。
 - 7) ヘイトスピーチは2009年に京都の朝鮮学校前で起こったのがきっかけとなり、東京や大阪でも激しいデモが起こった。2014年8月29日に国連人種差別撤廃委員会は日本政府に法規制を行うように勧告を行った。2016年6月3日にヘイトスピーチの対策法案が成立、施行された。
 - 8) 水山光春(2015)日本公民教育学会研究プロジェクト・ラウンドテーブル資料
 - 9) 松本慎平・桑原敏典(2009)「グローバル化社会を捉えさせる中学校社会科単元開発研究」『岡山大学附属教育実践総合センター紀要』9、pp. 41-42.
 - 10) 同上書、p. 42.
 - 11) ドイツの心理学者レビンが提唱した実践的研究。本研究では、「授業内におけるさまざまな問題を解決するために、教師自らが中心となって、その授業に関するデータを収集・分析し、その問題の解決策を導き出していく研究方法(三上：2000、関西英語教育学会紀要23号)」と定義する。社会科教育では、評価プロセスに着目した授業研究として峯らの研究(梅津正美・原田智仁編著：2015、教育実践学としての社会科授業研究の探求、風間書房、pp. 136-151.)がある。
 - 12) 藤原忠彦(2009)『平均年収 2500万円の農村―いかに寒村が豊かに生まれ変わったか―』ソリックブックス.
 - 13) 本時では、2つの新聞記事を資料として外国人労働者の問題について考える。一つは、「来日実習生『時給25円』人手不足 制度拡充の方針」(2014.12.25朝日新聞1面)という見出しの記事である。この記事を基に、外国人技能実習制度についての概要を知り、その問題点について考える。もう一つは、「きつい仕事外国人頼み」(同日、同紙3面)という見出しの記事である。この記事では、日本と同様の問題を抱えるシンガポールと韓国の例が紹介されており、ここから日本の外国人労働者の問題についての今後の方向性について議論が展開されている。
 - 14) ワークシート未提出者がいるため、ワークシート提出者の中での割合である。なお、提出できていない理由は、ノートに書いていたり何らかの理由で期日までにしなかつたり多岐にわたり、未提出者が必ずしも意欲のない生徒とは限らないため、考察の対象から除外した。
 - 15) 前掲 注(13)
- 付記：本稿は、平成26年度～平成29年度科学研究費補助金の基盤研究(B)「現代社会の課題を考察する見方や考え方を身に付けさせる公民教育カリキュラムの再構築」(研究代表者：唐木清志、課題番号：26285195)の研究成果の一部である。なお、本研究にかかわっては、第26回日本公民教育学会全国研究大会・課題別ラウンドテーブル、2015.6、日本公民教育学会研究プロジェクト公開研究会、2016.6、第3回日本教育実践方法学会全国研究大会・分科会、2016.9においてそれぞれ筆者が口頭発表をしている。

ABSTRACT

Teaching-Aids Preparation of Globalism Nationalism and an Identity by Elementary and Junior High Schools Social Studies: The Example of a “Foreign Workers Problem”

Yoshio HASHIMOTO

Key words: Foreign workers problem, globalism nationalism and an identity, Social Studies

The keyword which arrests modern society and which was known well has “Globalization.” The preparation for Globalization is called for also by the education policy. As one of examples, the system of teaching English at an elementary school was made. Globalization is recognized as a necessary thing. The social studies which make a social phenomenon applicable to study also need to take in change of the society by globalization.

This research is not aimed only at the globalization as an external phenomenon. I would like to examine it more deeply about an understanding of modern society by being aimed at “Nationalism” which is the “Globalism” and its opposite concept as “The Social View.” In the world, the more “Globalism” becomes strong, the more “Nationalism” has become strong as the reaction. Therefore, I think that we can understand modern society more by thinking of these both. Moreover, I think with reality that I can understand modern society concretely by considering the relations of the “Identity” as an individual way of life to be “Globalism” and “Nationalism.” I also have to understand rise of “Nationalism”, in order to understand the present condition of “Globalism.” “Globalism” and “Nationalism” are also the problems of a “Local.” “Global”, “National”, and a “Local” are in the same space, and are intermingled. Furthermore, it does not stop at space recognition. Mental recognition appears strongly. That is, I influence the “Identity” as my position. As a phenomenon, they are an immigration problem and a problem of refugees. In Japan, they appear as a foreign workers problem. Therefore, I thought that I could understand “Globalism Nationalism” and an “Identity” by taking up a foreign workers problem.